



暖
目
抄

全

45
949



カ一あひよす

上二つ下二かひの口念二ひ

上二めわ下二くの上二めわ下二くを

上二く下二めわ上二く下二く

口念二めわ二れ二の二りき二

り二も二あれ二

一太二か二た二く二あ二く二

上二か二下二く二あ二く二又二上二下二と二極二

上二下二と二わ二る二上二下二と二わ二る二

上二か二下二く二あ二く二上二下二と二わ二る二

と二く二下二め二わ二上二下二と二わ二る二

...

下二く二上二た二下二と二わ二る二

上二下二と二わ二る二上二下二と二わ二る二

上二下二と二わ二る二上二下二と二わ二る二

上二下二と二わ二る二上二下二と二わ二る二

上二下二と二わ二る二上二下二と二わ二る二

上二下二と二わ二る二上二下二と二わ二る二

上二下二と二わ二る二上二下二と二わ二る二

上二下二と二わ二る二上二下二と二わ二る二

一 昇二と二下二の二上二の二下二

上二下二と二わ二る二上二下二と二わ二る二

上二下二と二わ二る二上二下二と二わ二る二

...

...

一 ともよのやみむいふくや 純身云
 うそ 忠見かまいたしりーとまにふんりしりよこ
 くれとやうーとつりうの志よあふ二身ー
 一 夏のもよねはあまぬかひりしん
 人いよとや おもんうらまきん
 花らりふなれたありせはらふもあま
 人のこいれとう緒ーとく海ー
 一 棟梁いもよま向の下よとつれかあふいりく
 て 羽とほくーとつりよ
 かも 舞ひあふやふ月のみー
 ひとりーおれいあふーひん
 も

一 康秀いよりーと向の下よとつれかあふいりく
 多わと羽とほくーとつりよ
 一 よ
 今つくつあつとわられほもろん
 ふうよみそあふん人ーあらの花
 ろひまともれら枝まおれとま
 一 遍昭 素性さひにのりーれ下はうりさそまやら
 へふ志れあつてやうーとつり
 の
 梅乃ふれうまともみくひんさうこの
 あぬさう客のなへあまうな
 おかこの月とそめてーとつれそこの

はのれか人のおのむやなうりめ
一申のさかやりの下はあつてかぬはき
らなうりとつら

あ海の行ごさいのもつらむかむれや

みよもあつとせはたりよなま
おのひそく悪くまふはつらりれ

あまもくまふはつらりれ

一友別みり一旬の下よありて視とらひくおれ
やうくおとつらりれ

まのさうおひこの夜おさよゆうす
み山をりてをみうらつらなま

任りのま川とあまうあつらつらに

く怒らつらふおさつら

一或口傳云人を若くはむり一はさつらつら
つひつら人をむり一ありてつらつらつら

つらつら川お染えつらつらつら
つらつらつらつらつらつら

つらつらつらつら

おのひはつらつらつらつら

つらつらつらつらつらつら

風おまつらつらつらつらつら

つらつらつらつらつらつら

一 中絶のありしをいふはなほ母なる一七のころに
——いふはなほ母なる

一 後悔のふし相の目もいふはなほ母なる一七のころに
とやういふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
世亦もいふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
またいふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
いふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
すのふし相の目もいふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
——いふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
也たといふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる

ていふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
いふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
いふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
いふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
いふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
いふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
いふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
いふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
いふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
いふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる

いふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
いふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
いふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
いふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
いふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
いふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
いふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
いふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
いふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる
いふはなほ母なる後悔のふし相の目もいふはなほ母なる

られをうたへしといふ事案のしくよあかけきと
このことそちりさへもさうそらぬわへ

一 奇みあまのこの神あり

長奇 短奇 旋頭 混在 廻文 隠形 折句 疊句

排語也

一 長奇といふ人さうらう句ありて長と限

右人の一々かして師匠一人の短奇と

三十一字の奇といふ奇あらはれ三十一字の

名付れや各白三十一字の奇の初のみ

おせらるる一とさういへて終りて

とせらるるゆゆみしりのまはてらるる

何のうゆゆ始りてさうさうのといふ

長奇といふゆゆりさうさうのといふ

とゆゆ事ハ初のみしりてさうさう

とせらるるんひゆゆ初にけりて

の相あわるとさうさうさうさう

ゆゆ短奇といふゆゆりさうさう

奇のといふゆゆありとなり三代の

おまれあつ也といふかかれハ

かんくさゆゆをさう也といふ

一 聖句とつよとあま

あつらふとくまふしうはうらあま

うはのあまこつらなるこりり

一 さいあひ

ねのこつらあつらなるこりり

あまこつらなるこりり

一 贈言これのあまのこつらなるこりり

人のあまのこつらなるこりり

しあまのこつらなるこりり

あまのこつらなるこりり

あまのこつらなるこりり

てあまのこつらなるこりり
あまのこつらなるこりり
あまのこつらなるこりり

一 小町

あまのこつらなるこりり

あまのこつらなるこりり

あまのこつらなるこりり

あまのこつらなるこりり

あまのこつらなるこりり

あまのこつらなるこりり

あまのこつらなるこりり

あまのこつらなるこりり

侍もつゝのなるめよまゝなるめよ何
神のいぬまてあゆりまな

とらうたれいへ 業平女よりつて

あきこしと神はつらめなまし何

かきあつりしきりしあまん

一 大貳三位ともしよのゆるりよとあつたまひて
後冷泉院御舞

中人の心ゆゑにまじり

ういあやしつら行はさしうなん

とわやされい 大貳御舞

すこしりのまじりしきりしあまん

君うらとあゆりまを

うらうらとひねりまてまじりやうのなあり

ぬらうらとまじり也この外はあまなまじり

あつた人のりりやうまじりしきりしあまん

禁中御酒とてまじりまじりまじりまじり

君うらとまじり也上のまじりしきりしあまん

なりしきりしあまんの人とまじりかといひぬ

えよ上はるまじりあまのまじりしきりしあまん

一 あまむせしきりしあまのまじりしきりしあまん

甲しきりしあまのまじりしきりしあまん

いよあまのまじりしきりしあまのまじりしきりしあまん

このころそゆる義一といわくは又河院の内こころ
忠孝を志すまのせりつ出せしは後部と云ふを
出さしうりりぬぬと云ふ事ゆり河院の中宮
の命令に仲實前よ玉のこころのこころなり
ありかたぬと云ふ事ゆり又賢子のこころ
らひあら者云つ出せしは月誓隠し云ふもあつ也
と云ふ事ゆり河院の内こころのこころなり
たつらんともあつと云ふ事ゆり皆皆皆又云ふ
事ゆり河院の内こころのこころなり
事ゆり河院の内こころのこころなり
事ゆり河院の内こころのこころなり

このころそゆる義一といわくは又河院の内こころ
忠孝を志すまのせりつ出せしは後部と云ふを
出さしうりりぬぬと云ふ事ゆり河院の中宮
の命令に仲實前よ玉のこころのこころなり
ありかたぬと云ふ事ゆり又賢子のこころ
らひあら者云つ出せしは月誓隠し云ふもあつ也
と云ふ事ゆり河院の内こころのこころなり
たつらんともあつと云ふ事ゆり皆皆皆又云ふ
事ゆり河院の内こころのこころなり
事ゆり河院の内こころのこころなり
事ゆり河院の内こころのこころなり

あつひの影ひふれてゆくしむらびのまのりよりの
人の中あつりもいふとくわく二人をてふらりし
もまえんそとそんしつらそそ人いふとふららわく
あつひの影ひふれてゆくしむらびのまのりよりの
あつひの影ひふれてゆくしむらびのまのりよりの
あつひの影ひふれてゆくしむらびのまのりよりの

一 ちのつらさぬに再いし
山蔵 山蔵 山蔵 山蔵 山蔵 山蔵
吉野 秋田と名

あつひの影ひふれてゆくしむらびのまのりよりの
あつひの影ひふれてゆくしむらびのまのりよりの
あつひの影ひふれてゆくしむらびのまのりよりの
あつひの影ひふれてゆくしむらびのまのりよりの
あつひの影ひふれてゆくしむらびのまのりよりの

山やあすすの 山蔵 山蔵 山蔵 山蔵 山蔵 山蔵
あつひの影ひふれてゆくしむらびのまのりよりの
あつひの影ひふれてゆくしむらびのまのりよりの
あつひの影ひふれてゆくしむらびのまのりよりの
あつひの影ひふれてゆくしむらびのまのりよりの
あつひの影ひふれてゆくしむらびのまのりよりの

あつひの影ひふれてゆくしむらびのまのりよりの
あつひの影ひふれてゆくしむらびのまのりよりの
あつひの影ひふれてゆくしむらびのまのりよりの
あつひの影ひふれてゆくしむらびのまのりよりの
あつひの影ひふれてゆくしむらびのまのりよりの

くろもなとてさうこのの腐場あゝ造りの時れ例也
氏と芳うさす文をいへん儉物さうさういふあり
唐堯の言につれ橋とりらひるやの折とさうさう
りつため一也さそよの本丸殿よの周んご一給ひも
まの入り人かあひふのりさうさうを相このあ
かろんりもせ折らる

あささくや暮のむよの我わさく

ありのと一はゆいゆいさうさう

天智天皇の御事さうさうと終と民ととやさめさうさうい
うめさうさうさうさうと國の風俗とさうさういさうさ
らさうさうの御事さうさうのりさうさうれさうさうさうさうさう

うさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
多勢ともあさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
道ありん賢王のめえたる世よの徳の道とすて終
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
なまゆことと極さうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
と極さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
あさく大人のちさうさうさうさうさうさうさうさうさう

肉付なす^とのあつらんく^く也^いや^ららんく^くよ^らあ^ららん^ぬ
や^ららんく^くよ^らあ^ららん^ぬ院の清河君^いかり^く
あり^{らん}らん^くよ^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ言^はらん^ぬ
け^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ
く^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ
て^みらん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ
た^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ
む^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ
時^のゆ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ
あ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ
あ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ
あ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ

い^はらん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ
あ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ
一^つ言^のあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ
あ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ

あ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ
あ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ
あ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ
あ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ
あ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ
あ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ
あ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ
あ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ
あ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ
あ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬか^らあ^ららん^ぬ

るにさしつゝわがし得とこそもうわがのこしあまり
よわわらん又も産はくくはああれはこそさうさう
弁とゆひらひらうなることありて一塵衣羨のふひ
あつ事とあはれ也

く遍昭寺とて月つぎたゆるるに山家秋月と題して
うらうらうの中よ敷長物下うの糸も殿との
香よそぬくさうりつとまうらやたしくうた
とわがせ下されてまうれ清るとあまののりふみ
山家秋月とてふこととあはれなり
うらんとたれた山家のあはれなり
月のあまのさうり

伴の懐の草葉くさばと中流とてふはなはた
家してこりりあはれうらうら山乃やまの書かきとま
らせにやまのりいい範永はんえいのあまの感あまの味あじとて草
葉のうらうら 範永雅人武和弁得とてうら
つち終つらうらうらと範永あまのりの感よとて
うの草葉とてふひらうらとて錦にしきの袋ふくろよ入ていれ勢せき相あひ
てらひらうらとてうらうらとてうらとてうらとて
あつとあまのうのこしあまのこしあまのこし
さあはらうらとてうらとてうらとて

祇和弁よ前後の二句は此則定惠の二法天地二
 理也三重の次第とたてて迷れまよひ三毒三惡趣と
 也格のあまの三身三徳とある字痛八病とさうらうら
 回乃四苦八苦といふ儀也六句とわつ比六義とさうら
 り六身六根と表と九品十作とわつらひ九藏八身十
 男十如と表とらぬ也三十二字の次第相好と表すこれ
 けのらふれおんこのこととありあて
 われゆらりのみぬりさうらうら
 儀のらあのみぬりのこととありあて
 阿そひさうらうらとありあて
 いまのうらふれおんこのこととありあて

しくりなりさうらわれぬ事道らうらあさ戯なり
 思ふたうくけしとらとありひつりの法て一首二
 一折た三十七その佛とら三十一字の文と句と
 くさうらて法性随縁日月毒のやにむかひと
 とあさうらと照三禪那是の花婿傍の風
 けりさうらと親つて今生百年九回はあひさうら
 わあふ浦はとそわあひさうらとありあて

右秘書者愚老以一方之好以通海上百舟之懸揣
 口傳雜如雲霞後書細盡之文字之奇勢之入於心
 末代嬰兒能讀一書之大德深源不可出以文和初之全依
 辨撰者意潛挿心慮不の及他見穴賢

八宮右大臣後家息

左衛門佐基後 在判

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

師道より相傳の秘書一卷のつらそまらうの
 のさあよそいこまの相林よりかふんく名となり
 くらさひ梅く函の底よからしてひらあわさ
 くはあさしこく

五條三郎

釋阿 在判

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

しあはれかきしつ道はなればれはるるあ
まのしあはれの人よとてなむとてなむとてなむ
しあはれの人よとてなむとてなむとてなむ
の事なりしとてなむとてなむとてなむ
ふたふたのたぬとてなむとてなむとてなむ
ふたふたのたぬとてなむとてなむとてなむ

後感のしるしのるる

藤原氏 在

ふたふたのたぬとてなむとてなむとてなむ
ふたふたのたぬとてなむとてなむとてなむ
ふたふたのたぬとてなむとてなむとてなむ
ふたふたのたぬとてなむとてなむとてなむ
ふたふたのたぬとてなむとてなむとてなむ

心秘書ハ子の中卯にゆるるのしるし
一子とてなむとてなむとてなむとてなむ
ふたふたのたぬとてなむとてなむとてなむ
ふたふたのたぬとてなむとてなむとてなむ
ふたふたのたぬとてなむとてなむとてなむ

新編

ふたふたのたぬとてなむとてなむとてなむ
ふたふたのたぬとてなむとてなむとてなむ
ふたふたのたぬとてなむとてなむとてなむ
ふたふたのたぬとてなむとてなむとてなむ
ふたふたのたぬとてなむとてなむとてなむ

書と相傳せんとして起稿文とくさゆりた若く
くまらゆりたゆりたゆりたゆりたゆりたゆりた
ゆりたゆりたゆりたゆりたゆりたゆりたゆりた
ゆりたゆりたゆりたゆりたゆりたゆりたゆりた
ゆりたゆりたゆりたゆりたゆりたゆりたゆりた

起稿文と事

為氏 在

正安元年二月十七日

前大納言為世 在判

正保貳年五月吉日

刊行

